

「海に行きましようよ」

そう最初に言ったのは優香だった。

季節はやつと春を終え、初夏とも呼べるものにはなつてはいたが、やはり朝晩は肌寒い時も多い頃である。

先程ベッドで流した汗をシャワーで洗い落したばかりの美佐子が、私と優香とが横たわるベッドの端に腰をおろした。

「まだ早いんじゃないの」

優香がベッドから上半身を起す。

「大丈夫、お姉さん、沖縄なら」

美佐子が丹念に濡れた髪をバスタオルで拭いながら答える。

「そうね、あそこなら……」

「私、良い場所知ってるの。無人島がいっぱいあってね……」

「無人島か……」

私は、優香の背中の中の肩甲骨辺りに指を這わせながら、TVコマーシャルなどでおなじみの、南国の白い浜辺と青い空を空想する。そして強い日光を浴びながら、浜辺に佇む美佐子と優香の姿を思い浮べ、初めて美佐子の裸体を見た時に、その身体に付いていた水着の跡を思い出す。

「いいなあ、それ……、今頃なら人も少ないだろうし」

優香が私に振りかえる。

「そうでしょ、ねえ、行きましようよ」

「フフフ……良いわ、賛成」

美佐子の微笑みながら答えた。

優香の背筋をなで下ろすように指を這わしていくと、彼女がくすぐったそうに身をよじりはじめた。

私は、彼女の背中から腰へかけての柔らかな曲線と、その動きを見詰めるうちに、先程美佐子に対して消耗してしまったはずの衝動が、再び湧き上がってくるのを意識する。

私はベッドから半身を起し、彼女の背中に胸を密着させるようにして、後ろから抱しめる。

「いつ出発しようか？」

私は抱しめる手をそのままに、二人に問いかける。

「今依頼されている原稿があるから一週間後つてとこね」

美佐子が答える。

「……私の方はほとんど済んでるから二、三日あればOKよ」

一ヶ月前から、彼女は私とは別のシステム開発の仕事を割り振られていた。

「相変らず仕事が早いなあ、俺は……やっぱり一週間はいるなあ」

そう言いながら私は、優香の首筋に軽く唇を当て、脇の下から回した両手で、彼女の乳房に触れる。

両手で、ゆつくりと乳房の柔らかさを楽しむように揉み上げてから、乳首に指を当てると、すぐに乳首は反応して硬くなる。

優香の息遣いが少し早くなる。

「じゃ……決り、ね……」

私は、優香のうなじに顔をうずめて髪の毛の匂いを吸い込みながら、真正面の美佐子に視線を向ける。

美佐子が悪戯っぽい視線で答えた後、身体にまいたバスタオルを床に投げ出し、私に乳房を愛撫されている優香ににじり寄る。

低い含み笑いを漏らす美佐子の目は、先程セックスを終えた者のようには見えない食欲な光を湛えはじめている。

美佐子が、優香の固くなった左側の乳首を咥え、右手でもう片方の乳房と乳首を愛撫し始める。

優香の乳房から手を離れた私は、彼女の細い両肩を掴み、項から首筋、そして背中に舌を這わして行く。

優香の顎が上り、その優雅な曲線を描き出す首筋が張る。彼女は目を閉じ、唇から男心を刺激するような小声を上げる。

私は、ベッドを押し下げている優香の腰の辺りに手をさまよわせ、そしてその尻とベッドとの狭間に手を差入れる。ベッドのスプリングがその手を押し上げ、手を優香の性器と、その周辺に押付ける。小さく手をうごめかすと、優香が腰をよじり、膝を立てる。

美佐子が優香の乳首から顔を離し、優香に囁きかける。「脚を開いてあげるの、そしたら、もっと気持ち良くしてもらえるわ……」

美佐子は、優香の固くなり、彼女自身の唾液で濡れた乳首を、舌で弾くように舐め上げる。

優香が、ベッドシーツを膝で押し広げるようにして脚を広げる。優香の豊かな腰と太股、そし

て股間とが描き出す台形の頂点に、私は目を引付けられる。大きく脚が開かれている為に、その秘めた内部までを晒している性器、まだ固い窄まりを維持している膣口。そして肛門。

私は、手をその尻の狭間に差入れ、優香の性器を愛撫する。人差指と中指、そして薬指を使って、彼女の内側の襞を軽く挟みこみ、中指の指先を、まだ柔らかな陰核に当てる。優香が息を荒くし、首を微かに振り始めると、美佐子が身体を立て、優香の唇を吸う、すぐに優香の舌が美佐子の唇を割り、絡まり合う。

美佐子は、自分の乳房を両手で持上げ、既に固くなった自分の乳首を、優香のそれに擦り付け始める。

私はその二組の乳首の絡まり合いを見詰め、二人で始めてセックスを行った時の事を思い出す。欲望が昂じる。

私は、優香の性器が潤いだすのを感じ取る。中指をくねらせ、その滑りを指に十分にまぶした後、膣に中指を挿入する。一気に指の根元まで差入れると、優香が小さく声を上げた。指の腹で、暖かく微妙な感触を持った膣壁を擦り上げるようにして、指を前後に動かすと、指の根元が締め付けを感じる。

美佐子が優香の唇を離し、一層お互いの乳房を擦り合わせる愛撫を、激しくしながら優香に囁きかける。

「私にのに触って……、そして自分のにも……」

優香は、次第に激しくなる快感に濁った目を開け、肯くと、美佐子の股間に手を伸ばす。そこはもう濡れ始めていた。

優香が美佐子の性器に指を這わし、陰核を愛撫する。美佐子の腰がくねる。

「あ……」

小さな声が美佐子の唇から漏れ、陰媚な光を宿した視線が、優香に向けられる。人差指が美佐子の膣に挿入されたのだ。

「もつと……」美佐子が呟く。

優香の白く細い中指が、既に美佐子の膣に潜り込んでいる人差指を押しつけるようにして挿入され、指の根元が陰核に押付けられる。

美佐子は、優香の揃えて挿入された二本の指から、快感を導き出そうかと腰を振る。

優香はその美佐子の動きに同調するように、ゆつくりと指を前後に動かし始める。

その淫らな、美佐子の腰の動きを見詰めながら、優香はもう一方の手を自分の股間に伸ばし、陰核を円を描くように指を動かしながら、愛撫し始める。

私は優香の膣内で指をうごめかせ、その肉の感触を充分に楽しむ。私の欲望の昂ぶりを教える

為に、私は、固く張詰めたペニスを優香の尻に押付ける。

優香の柔らかな尻が、私の押付けたペニスによって僅かに歪み、尿道から染みだした粘液が、優香の尻を僅かに濡らす。

私は、亀頭を優香の尻に這わし、ペニスの先端に感じる鋭角的な快感を味わう、そしてその快感が、私のペニスを更に硬化させ、欲望を高める。

私は優香の膣から指を抜き、両手で優香の尻を鷲掴みにし、左右に押し開く。腰を密着させるようにして、ペニスをその尻の狭間に押し当て、充分に愛液にまみれた優香の生殖器周辺と、肛門に亀頭を這わす。

私がペニスを、生殖器の下端と肛門の間の短い部分に押し当てた時、優香が大きく声を上げる。自分の陰核をまさぐっていた優香の手が、股間を回りこむようにして後ろに回され、私のペニスをまさぐる。

「熱い……」優香が囁く。

優香の手が私のペニスを握り締め、五本の指が私に快感を送り込む。

私は腰を前後に動かし、優香の手にペニスを擦り付ける。握られた私の赤く充血した亀頭と、それに絡み付いた、優香の白く細い指とが、陰媚なコントラストを示し、その光景に、私は更に腰の動きを早める。

ペニスの先端から滲みだした粘液が優香の指を汚し、糸を引く。

優香を貫きたいと言う衝動が限界に達した時、私はベッドに身体を横たえる。

その私の合図を待構えていた二人は、すぐさま互いの身体を離し、ベッドに横たわる私を求めるように縋り付き、交互に私の唇と舌とを味わう。

優香が、私の下腹部に跨るような格好でベッドに膝を付き、左手で、私の固くそそり立っているペニスを掴み、右手で自ら開いた生殖器の中心に当て、そして腰を一気に落とし、挿入する。

私は、優香の膣壁を亀頭が押し開くようにして、内部にペニスが埋没して行く時の快感に、低く声を上げる。

自らの行動によってペニスを、その内部に納め切った優香が、顎を上げ、快感に酔った表情を浮かべながら、私との結合点を中心にして、腰を押えつけながら回し、ペニスの付根で陰核が刺激される時の快感を味わう。

優香が両手を私の腹に置き、腰を上下に振り始める。私のペニスと、自分の生殖器との接点から生み出される快感を味わいながら、優香は半開きになった視線を私に向ける。

私は、その優香の陰媚な表情と視線を受止め、そして私の腰を柔らかく締付ける優香の太股の動きと、股の狭間で出し入れされている、愛液で濡れたペニスを見詰め、興奮を更に昂ぶらせる。

私と優香の接点で、淫らな音がしだした頃、美佐子が私に覆い被さるように抱き付き、胸に舌を這わしだす。私の肌に美佐子の熱い息がかかる。

私は、まだ湿ったままの美佐子の髪に残る、リンスの香りを吸込みながら、首筋から背中にかけて手を這わす。

美佐子が私の胸から身体を起し、ベッドに付いた両膝を大きく広げ、その中心の濡れた性器を、私に見せ付けるように両手を股にかけ、左右に開く。

性器の中心部の、ピンク色をした複雑な肉壁と窄まりが愛液により濡れ光っている光景が、私の視線を奪う。

私は、美佐子の性器を押し広げている手を掴み、引寄せ、その愛液で濡れた指に舌を這わす。その私の合図に、美佐子は私ににじり寄り、私の顔を跨ぐよう格好で、脚を広げ、腰を僅かに落とす。

美佐子は、両手を性器付近の肌が、粘膜に変わり初める辺りに当て、左右に押し開き、私の目に、濡れた自分の性器が熱く充血している姿を晒す。汗で湿った陰毛の中で、その形を際立たせている陰核、ピンクと言うよりも、既に赤色に近い複雑な襞、小さく口を開ける尿道、そして内部の肉壁を微かに覗かせる膣、その全てが愛液で濡れ光っていた。

私は両手を美佐子の尻に当て、自分の唇に向けて引寄せる。

私は美佐子の性器に舌を這わす。石鹸と香水、そして雌の匂いが、私の鼻孔をくすぐり、愛液の滑りが私の舌に絡み付く。

私が先端を尖らせた舌を膣に挿入した時、美佐子は自分の陰核を指で摘み上げ、もう一方の手で乳房を掴み始める。

私は膣の中で舌をくねらせ、美佐子に快感を送り込みながら、両手に掴んだ彼女の尻の肉を揉み上げるようにして、その量感と柔らかさを味わう。

私の身体の下で、二人の女性が快感の声を上げ始める。

私の下腹部で、快感を味わっている優香の腰の上下の動きに、押付けるような動きが混じり始める。息が短く、そして早くなる。

優香は、自分の内部からの耐え切れない快感の高まりに、切迫した表情を浮かべながら、次第にその腰の動きを早めていき、私の腹に置いていた両手で、自らの乳房を鷲掴みにし、強く揉みしだく。

私の腰を締め付けている優香の太股が、次第にその締付けを増し、早い動きで私の腰を擦り始める。

優香は自分でも意識していないだろう、快感の声を上げながら、ピークが近いのを私に教える。私は、その優香の腰の動きを助けるように、ベッドの弾みを利用して腰を突上げ、そして大きく引く。

その動きを何度か繰返すうちに、私の動きと、優香の動きが同調し、より深部にペニスを突き入れられる快感を、優香は身体をよじりながらに貪る。

優香の上げる快感の声に、美佐子が刺激され、陰核への愛撫を強める。

「お願い……、もっと強くして……」

美佐子が、性器を私の開いた口に押付け、哀願する。

私は、美佐子の性器に挿入した舌を激しく出し入れし、膣口周辺を舌で擦り上げる。

美佐子が、両手を自分の陰核付近に強く押付け、こね回すように動かし始める。

腰の中心からペニスへと衝動が突通り、私はピークが近いのを意識する。腰の動きを早める。

美佐子が腰を浮かせ、私の唇から性器を外す。私の舌の与える快感よりも、強い快感を求めて、

美佐子の両手が自分の性器をかき回すように動く。

私は目の前で展開される、美佐子の激しいマスターベーションを見詰めながら、射精の衝動に耐える。

優香は私の腰の上で、憑かれた者のように腰をリズムカルに、そして激しく上下させ、うわ言のように、迫り来るピークを知らせる言葉を繰返す。

私の目前では美佐子が、自分の性器の壁と陰核を激しく撫で回しながら、興奮と快感の熱い息と言葉を、私に向かって吹き続ける。

「見て、見て、私を見て、目で私を犯して」

美佐子の指が二本、愛液を滴らせ続けている膣の中に潜り込み、内部を刺激し始める。その強い快感に、美佐子の太股は筋肉を緊張させ、細かく痙攣のように震え始める。そして自分のピークが近い事を、私の腰の上で快感を貪る優香に伝える。

「……もうすぐ、もう少しで……ああ……、一緒に一緒に……」

優香の太股が、私の腰を強く、痛みを感じる程に締付け、腰を深く落とし、私のペニスを今以上に深く味わいたいと言うかのように、下腹部に押付ける。そして一瞬息を詰め、全身を緊張させながら、強いピークを迎えた時の、甲高い声をその喉から絞出す。

美佐子が、その優香の声を聞き、押えていた快感への最後の一押しを自分に許す。

既に根元まで内部に潜り込んでいた二本の指を、更に奥に挿入し、くねらせる。美佐子の股間

の筋肉が張詰め、その緊張した腱の形をあらわにし、その時私の目は、まるで一匹の生き物のように、美佐子の膾口が指を締付けたのを見る。

私は、次の瞬間ペニスの内部に貫き通った、強い快感に目を閉じ、腹筋の緊張により上半身を僅かに起す反射的な動きとともに、激しく射精する。

優香が、ピークの後の、次第に緩やかなカーブを描いて消滅していく快感の後味を満喫するような、大きな息をつきながら、私に覆い被さり、抱き付く。その彼女の動きに、私のペニスは優香の内部から滑り出し、優香が小さく声を上げる。

美佐子が、膾から指をゆつくりと抜き、その濡れた手をベッドにつき、身体を回し、私の胸で、まだ荒い息をついている優香の肩に触れる。

優香が、物憂げな視線を美佐子に向け、そして二人は軽く唇を合す。

私達三人が、沖繩に向かうANAの機上の人となったのは、それから八日後の事であった。



薄い雲も下方に飛び去り、抜けるような青空の下、ジェット機が水平飛行に入る。

まだ柔らかな朝日が窓から差込み、機体の旋回につれて機内で影が移動し、その表情を変えて行く。

ベルト着用 of 指示ランプが消え、機長のアナウンスが始る。

私達三人は、機体の中央あたりの三人掛けの席に並んで座っていた。美佐子が窓側、優香が通路側、そして私が中央である。早朝の始発機であり、ウィークデイでもあった為に、比較的機内は空いていた。

前方のスクリーンで、お決りのライフジャケットの説明が始る。

私達三人が顔を合せたのは、この旅行を決定した日から、今日が始めてであった。

私と優香はもちろんの事、自由業である美佐子でさえ、この比較的長い休暇を取る為には結構、片付けなければいけない仕事が多かったのだ。

この旅行のお膳立ては、提案者である優香がその殆どを引受けてくれた。以前友人と何度か訪

れた事があるらしく手慣れたものであった。目的地である離島までの交通機関、民宿の手配、そしてその民宿をベースキャンプにしての無人島でのキャンプの準備。

その準備に疲れたのか優香は今、離陸前にスチュワードから受取った毛布を身体に掛け、まどろんでいた。その寝顔はまだあどけさを残したものであり、セックスの時に時折見せる、快感に憑かれたような淫らな表情は、陰りさえ窺えない。

優香の目の辺りに日光が差し、小さく声を上げて顔を背ける。

私は薄い毛布を通して、輪郭を浮上がらせている優香の身体に視線を向ける。フラッシュバックのように、脳裏にこの前のセックスで私の下腹部に馬乗りになり、腰を落して行った時の彼女の表情が浮ぶ。ほぼ一週間の禁欲が、私の性欲を鋭く刺激する。

私は肘掛の下から毛布の中に手を差入れ、優香のピツタリとしたジーンズに包まれた太股に手を這わす。

優香が眠ったまま身じろぎし、私の方に身体をもたれかけてくる。

私は手で、優香の太股の張りを味わいながら、ゆっくりと下に回し込み、どっしりとした腰を通過させ、座席と尻の間に差込む。洗いざらしたジーンズの、ザラザラとした手触りの奥にある、優香の尻の柔らかさに触れる。

優香が小さく声を上げる。

美佐子が私の肩に手を掛ける。振返る私に微笑みながら「悪戯しちや駄目、寝ているんだから……。ねえ、するんだったら……」

美佐子が、肘掛にあるスチュワードスのコールボタンを押す。

私は、通路を歩いてくるスチュワードスの姿を認め、慌てて優香の尻に這わしていた手を抜く。その私の慌てた様子を笑いながら、美佐子がスチュワードスに毛布を二枚頼んだ。

受取った毛布を、自分と私の身体に掛けた美佐子が、私にウインクし、後ろの座席に人がいないのを幸いに、座席のリクライニングを最大にして身体を倒す。

私はこらえ切れずに、笑いを漏らす。「まったく君は……」

美佐子は悪戯っぽい視線を私に向け、スカートをはいた下肢を僅かに広げる。

「フフツツ、どうぞ存分にね」

私は美佐子と同じように、座席のリクライニングを調節して身体を倒し、毛布の下から、美佐子の開きかげんになった下肢に手を伸ばす。

滑らかな手触りのスカートの生地を手を這わせ、腰の辺りにあるジッパーを探り当てる。美佐子が私の手の動きを助けるように、少し腰をひねる。私の手は開かれたジッパーから、その内部に滑り込む。

僅かに汗で湿った美佐子の太股が、私の手に触れ、その滑らかな手触りを味わいな私は指を動かす、内股に向けて手を進める。

美佐子が私に身体を寄せて来た。二人の距離が縮まり、私は腕を無理に伸ばす事無く、美佐子の内股を愛撫する。美佐子が目を閉じる。

私は撫で上げるようにして、手を美佐子の脚の付根辺りまで進める。美佐子が更に脚を開く。美佐子の体温の温もりが手に伝わってくる。私はパンティの端から人差し指を中に潜り込ませ、陰毛をかき回すように、その手触りを楽しむ。

一旦指を抜き、引き下ろそうとパンティに手を掛けた時、美佐子が目を開け、小声で私に囁く。

「駄目、毛布を汚しちゃうわ……」

「フツツ……じゃ、濡らさないようにすれば良い」

「もう、馬鹿……」

私はパンティを下げるのをあきらめ、薄い生地の上から、美佐子の性器に手を這わす。掌全体で包みこむように性器全体に手を当て、指を、優しくマッサージでもするかのように動かす。

美佐子が、溜め息にも似た息を吐き、再び目を閉じる。

私の指に、薄い生地を通して美佐子の性器の形と、暖かさが伝わって来る。人差し指と薬指で、生地の下の子の二枚の襷を押し広げ、中指を、その中央に擦り付けるように動かす。

美佐子が唇の端を噛む。私は、中指にパンティ越しの湿り気を感じる。

私は美佐子の耳に唇を付け、囁く。「毛布が汚れるぞ」

美佐子が目を開ける。「……馬鹿……」私の頬にかかる、その息は先程までとは違って、熱い。

私は、美佐子の臍の下からパンティの中に手を差入れる。陰毛のざらつきの下に、指が、濡れた粘膜を感じ取る。中指をその奥に進める。

美佐子が目を閉じる。唇が漏れだす声を封じ込めるように緊張する。

指の付根に陰核を感じる、揉み込むように刺激しながら、指先を膣の周辺にさまよわせ、流れ出す愛液を十分に指にまぶし、そして膣に挿入する。

指の腹で、膣壁を撫で回すように指をうごめかせる。

美佐子が脚を閉じる。私の指の動きが止る。

「駄目、我慢出来なくなっちゃうわ……」

その美佐子の言葉に、何かふざけた台詞で答えようと考えていると、私の目に通路でコーヒを配るスチュワーデスの姿が見える。

私は、美佐子のパンティから手を抜く。

「ふうっ……」と、スチュワーデスから受取ったコーヒを一口、すすりながら美佐子が息を

吐く。もうその瞳からは先程の欲情は消え始めていた。

私は、コーヒーの代りに受取ったスープをすすりながら、股間の緊張が徐々におさまって行くのを感じる。

再び美佐子の耳に唇を寄せ、呟きを吹込む。

「到着するまでグツグツ煮えてるからな」

「フフフ……た・の・し・み……」

美佐子が首を回し、素早く私の頬に軽く唇を当てる。

シートベルト着用を指示するアナウンスが入り、機体が細かく振動を始める。

「当機はまもなく那覇国際空港に着陸致します。那覇の気温は現在二八度。天候は快晴、ただいまを持ちまして正面スクリーンでの番組を終了させて頂きます。尚、お乗継のお客様は……」

私達二人を乗せたジェット機が、既に夏の趣を持った強い日光を受けながら、海の中に忽然と表れたかのように見える滑走路に向かって、次第に高度を下げ始める。



「二年前と変わっていないわ」

優香が明るく微笑みながら、私達三人のベースキャンプとなる民宿の前に立って、言った。

那覇空港からタクシーで小さな港まで行き、定期連絡船に乗って更に数時間。私達が目的地である、離島の民宿に到着した時は、既に昼を過ぎていた。

昼食を民宿で済まし、宅配便で送ったキャンピング道具一式と、民宿で借りた三人分のスクーパーダスビングの道具を小舟に積込んだ後、私達は、民宿の主人である初老の男の操縦で一時間ほどの行程にある小島に向かう。

その小島は周囲一キロにも満たない大きさであり、島と言うよりは、海面に突出した岩と表現した方が適切な物らしく、そこには地元漁師の為の、漁具が置かれた小屋が一つあるだけらしい。

海面を軽快に走る船の中で、私はわざと海風を全身に浴びる為に身を反らせ、その爽快さと、島で二人の女性と過す事の楽しみへの期待を、全身で感じ取っていた。

その私の耳に、視線を前方の海面に据えたまま、船尾のモーターの舵に手を置いている民宿の主人の声が聞えてくる。彼の斜め横に座る優香に話掛けた言葉だった。

「お久しぶりですなあ……もう二年ほどになるでしょ」

「ええ、それぐらいね」優香が振り返り、答える。

「確かあの時は、他のお友達と一緒にでしたね。あの方は？」

優香の表情が一瞬、曇る。「さあ……どうしてるのかしら……」視線を再び、主人から反らし、前方の海に目をやる。

「そうですか……」

主人は優香の表情の変化を感じ取ったのか、それで会話が途切れる。

私は優香に目を向ける。その私の視線に気付き、優香が意味の無い微笑みを私に向ける。だがどこかその表情は、別の事に思いを馳せている者の表情だった。

船が小島に到着する。

四人で荷物を船から下ろした後、主人は喫水の上がった小船を器用に操りながら、民宿に向けて出発する。

手を振る私達に、笑顔で手を振ったその姿が、やがて小さくなっていき、辺りの空気を震わせていた船外機の音も波間に消える。

私は太陽を反射してキラキラと光る海面を見詰め、大きく背伸びをする。袋脛あたりには波が打寄せ、私の足は白く漂白された浜辺を踏みしめている。風は僅かに潮の香りのする微風、強いとはいえ、まだ夏の強烈さとは違う日光が周囲に満ち溢れ、聞えるものと言えば、遠くの漁船の汽笛、背後にある僅かな叢の葉音、そして私の脚に打寄せている微かな波の音。

私は、後ろに立って海を見詰めている美佐子と優香に振り返る。

「さあ、バカンスの始まりだ」



腹の辺りに海水が達した時、私は青く澄んだ海の中に身体を躍らせる。一瞬ヒヤリとした感覚が全身を覆うが、すぐにそんな感覚は消え去ってしまう。

ほぼ一年近くも泳いでいないのにもかかわらず、身体はすぐに泳ぎを思い出し、私は更に沖に

向かって進み、水中に身を踊らせる。

水中マスクを着けた私の目に、驚く程の透明感をもった海水を通して美佐子と優香の姿が見える。

私は二人に水中で飛掛かかり、歓声を上げさせる。それをきっかけにして、水を掛合い、まるでお互いにじゃれつく三匹の小犬のように私達はふざけ合う。

私達が跳ね上げる海水の飛沫が、太陽の光を反射し、一瞬きらめき、その乱反射光の中に美佐子と優香の歓声が突通って行く。

一時間後。

私は美佐子と共に、浜辺に身体を伸ばすようにして仰向けに横になっている。二人の脚には、波がまるで愛撫でもするかのように優しく打寄せ、眠気を誘うような微かな波音をたてている。

「優香は？」

私は、美佐子のセパレーツの水着に覆われた平たい腹に手を当て、問いかける。

美佐子が肩肘をつき、身体を起して私に微笑みかける。「ダイビングの場所を探すって出かけたわ……」

「フツツ、つまり、すっかり話は付いているって事か」

私は笑いながら、いつの間に優香と美佐子がそんな話しを交わしたのかと考える。

「話しなんかしてないわ……、お互い察するってわけ」

「女性は恐いよな」

私は美佐子の乳房に水着の上から触れる。少し固めの水着の生地を通して、その下の柔らかさが手に感じられる。

私は美佐子の乳房を掌に包みこみ、ゆっくりと揉む、その手の動きによって水着から染みだした海水が私の手の甲に流れる。その海水は美佐子の体温により、暖かい。

美佐子が私の頬に手を伸ばし、軽く触れる。

「随分、煮立った？」

私は人差指を立て、水着の上から爪で美佐子の乳房の頂点辺りを引っ搔くように乳首を刺激する。やがて生地を通してさえ、その輪郭が指に感じられる。

「ああ、飛行機の中からだからな」

美佐子の唇が私の唇に触れる、一瞬離して、これから私達が共有するであろう、快樂を期待するような掠れた声で囁く。

「……私もよ……」

美佐子が、強く私の唇を吸う、強く。

私は微かに塩の味にする美佐子の舌を味わいながら、彼女の両肩から水着を外す。

そのまま下にずり降りし、乳房をあらわにする。日光が彼女の白い乳房と、くすんだような乳首とのコントラストを強調するかのようになり、その表面についた海水を光らせる。

私は美佐子に覆い被さっていく。彼女の乳首を啜えこみ、舌を絡める。その私の舌の動きに反応し、乳首がますます固くなり、美佐子が再び身体を倒し、両腕を私の背中に回す。

美佐子の両方の乳首に付いた海水を舐め取った後、私は美佐子を浜辺に立たせる。

両膝を海水に浸けたまま、彼女を見上げる。

美佐子は照れ隠しの微笑みを浮かべ、視線を私にまっすぐに向け、腹の辺りまで下げられた水着に手を掛ける。

「見たい？」

「ああ、見たい」

美佐子は思い切るように髪を一振りし、水着を取去り、足元の砂の上に落す。

私は太陽の光の下に全てを晒す美佐子を見上げる。海風が彼女の髪を僅かにたなびかせ、柔らかく、そしてどこか力強さを感じさせる身体の曲線を、日光によって生じた陰影が強調する。

「抱いて……」美佐子が呟く。

私は美佐子の前に水着を取った全裸で立つ。美佐子の両腕が私の首に回され、私は美佐子の背中に両腕を絡み付かせる。

美佐子が目を閉じ、私の耳たぶに軽く歯を立て、既に勃起している私のペニスを、自分の下腹部に密着させるようと片方の太股を上げ、私の腰に密着させる。

私は美佐子の尻に両手を当て、引付けるように力を入れる。ペニスに美佐子の陰毛のざらつきが感じられる。

美佐子が私の前に跪つき、両手を私の腰に当て、ペニスに舌を這わす。

美佐子の舌がくすぐるようにペニスを刺激し、尿道付近を軽く吸上げる。ほぼ一週間の禁欲が、急速に激しい快感に変貌し、私の腰の中心部から、衝動となってペニスへと駆抜ける。

ペニスの尿道と、美佐子の舌尖とに粘液が細い糸を引く。

美佐子の唇が、私の亀頭全体をすっぽりと包みこむように啜えこみ、その口内で舌が亀頭を這い回る。手が私の袋をさすり上げる。

私は強く、苦痛にも似た快感を感じ、何時もなら充分に耐えることの出来る衝動が、前立腺の辺りから生じ、それによって勃起しきったペニスに、痙攣にも似た動きを美佐子の口内で見せる。

ペニスを啜っていた唇を離そうと、美佐子が身体を引く。私はその動きを肩に手を当て押し留める。

美佐子が問いかけるような視線を私に向ける。私は軽く肯く。

美佐子がペニスへの愛撫を再開し、私は彼女の舌により生じる快感に身をゆだねる。

私は美佐子の、ペニスを吸上げている為に少し窪んでいる頬に手を当て、ペニスを啜えた唇に視線を当て続ける。その情景が私の欲情を強く刺激する。

美佐子が唇を窄め、ペニスを締付けるようにうごめかす。

美佐子が目を開け、見下ろしている私の視線にその視線を合す。しっかりと私の目を見詰めたまま、ゆっくりと首を前後に振り、唇でペニスを刺激する。

ペニスの表面に浮き上がった血管が、美佐子の唇に見え隠れし、その都度、快感と射精の衝動が増幅されて行く。

私は一瞬、感じている快感が消滅し、射精への強い衝動が急激に昂まって行くのを意識する。

その私の衝動を美佐子は感じ取り、唇の動きを早める。

一瞬の間だけ消えていた快感が、以前にも増して全身に波紋のように広がり、私はその快感に全身を緊張させ、喉の奥でうめきの声を上げる。

快感の頂点で、私は美佐子の口内に射精する。

その瞬間、私は強い日光のきらめきを脳裏に描く、それが射精の快感により生じた幻想か、それとも実際に見た太陽の光そのものであったかを気に掛ける間もなく、私は目を閉じる。

美佐子は舌で私の精液を受止め、溢れた精液は、美佐子の唇の端から漏れだす。

私は二度激しく射精し、その後の急速に収まっていく快感の中で、美佐子の唇から漏れだした精液が、長い糸を引いて波間に落ちるのを見る。

射精の間、止っていた美佐子の舌と唇がゆっくりと動きだし、極軽く私のペニスを刺激し始める。その僅かな動きにも私は反応し、ペニスの痙攣とともに、尿道の中の精液が漏れだすのを意識する。

私はペニスから唇を離れた美佐子の顎に手を掛け、上を向かせる。

酔ったような視線を私に向けたまま、美佐子が白い精液が付着した舌を唇から覗かせ、溢れ出した精液を舐め取る仕草を、私に見せ付ける。

美佐子の喉が動く。

美佐子が波打際に、海に足を向け横たわる。打寄せる波が太股と下腹部にまで達し、彼女はその波を受入れるかのように、脚を広げる。

私は、その開かれた脚の間に膝を付き、美佐子の波に揺れる陰毛に手を触れる。

美佐子が膝を立て、その頂点にある性器を私に晒す。海水に浸かっていた彼女の性器は、その冷たさの為か幾分縮こまっているように見えた。

私は顎が海水につかるほどに姿勢を下げ、美佐子の陰毛に舌を這わす。

塩辛さと微かな苦みが口内に広がり、私は陰毛のざらつきを舌に絡み取る。美佐子が膝の角度を変え、私の唇は彼女の性器に触れる。

私は美佐子の膝に手を当て、大きく脚を開き、身体を二つ折りにするかのようになり、太股が彼女の乳房に触れるぐらいにまで、曲げる。

大きく開いた美佐子の脚の頂点にある性器が、その開かれた姿を晒し、太陽の光がその奥にまで差込む。

私によって深く折曲げられた自分の脚の間で、美佐子が日光の下に自分の一番秘めた部分を晒す事の恥ずかしさに顔を赤らめる。

「電灯の下とは違った色に見えるよ」

私は美佐子の羞恥心を煽るように言葉を掛ける。「H……」美佐子が顔を背け、彼女の頭の下で、砂が微かな音を立てる。

私は美佐子の性器の中心に唇を当て、舌を差出し、膣口に触れる。

海水によって冷やされた膣口の周辺を、私は舌で愛撫する。陰毛から流れ落ちた海水の塩辛さが口に微かに苦い。

美佐子の膣が、海水よりもっと密度の濃い液体を染みださせる。本来ならば、ほのかな塩気を感じるはずだが、海水の為か私はかえってその彼女の愛液に甘みさえ覚える。

愛液を絡め取った舌がその滑りにより、スムーズに美佐子の性器を這う。海水で冷された性器に暖かさが戻り始める。

美佐子が腰を上げ、私は膣の中に舌を滑り込ませる。

頬に感じる美佐子の太股の冷たさと、舌に感じる彼女の内部の暖かさのコントラストが、私の欲情を刺激する。

ペニスに力が戻り始めるのを、私は意識する。

美佐子の性器から私は唇を離し、彼女に覆い被さるように、身体を重ね合わせる。

腰の辺りに波を感じる。

乳首を吸上げる私に、美佐子が囁くように言う。

「ちよつと待って、このままじゃ砂が……、入っちゃう……」

美佐子が私の下で身体を回し、背中を向ける。私が彼女から身体を離すと、美佐子は膝を付き、その尻を高く掲げる。

私は両手で海水を掬い上げ、美佐子の尻に掛ける、尻に付いていた浜辺の砂が流れ落ち、開き気味になった彼女の股の間から、陰毛を伝って滴り落ちる。

股間に感じた海水の冷たさに、美佐子が腰を震わせる。

私は美佐子の腰に両手を当てると、彼女は更に脚を開き、背中を逸らせる。

海水によって、美佐子の性器に張付く陰毛を、亀頭でかき分けるようにして私は、ペニスを彼女の内部に進める。

美佐子は、私と同様の禁欲期間の末に感じる、押し開かれるような挿入の快感に背中をくねらせ、喜びの声を上げる。

美佐子の膣の壁が、ペニスに絡み付く。

私は深く美佐子の内部に挿入し、その奥にある暖かさを十分に亀頭で味わい、そして動き始める。

海水に浸かった私の太股が、その動きによって新たに小さく波をたてる。

美佐子が、腰と背中を性器より生じる快感によってうごめかせる。浜辺に付いた手が砂を握り締める。首を振り、髪の毛が揺れる。

波の音に美佐子の快感の声と、私が突上げるたびに吐出される深い息遣いの音が混じる。

美佐子が自ら尻を私に押付け、私の動きを助ける。声が激しくなり、筋肉の緊張により背中に背骨が浮き上がる。

私と美佐子の動きが、リズムを取っているかのようにピッタリと一致する、既に脳裏からは他の思考は消え、セックスの快感のみが二人を支配する。

私は美佐子の尻の弾力を、太股と下腹部に感じながら、腰を動かし続ける。

美佐子が上げる声が一瞬大きくなり、髪を振上げるように顎を逸らす。美佐子の膣がペニスを締め、私は彼女が達した事を知る。

私は動きを止め、そして、動きを再開する。

美佐子が私の動きに反応して、大きく声を上げる。私と美佐子の動きに再度、リズムが生じる。

私は自分のピークが近づいて来たとき、動きを早める。太股に当る美佐子の尻が大きく歪み、濡れた膣口にペニスが出し入れされ、その内部の壁がペニスを擦り上げ、刺激する。

二人の接点から漏れだした愛液が美佐子の太股に滴れ、海に解けこむ。

私の美佐子の腰に当たった手に力が入り、指先が白くなる。

私はペニスをより深く美佐子の内部に挿入し、射精する。次の瞬間、精液のほとばしりを内部に受止め、美佐子も同じくピークを迎える。

止った動きの中で、私は全身に当る海風の冷たさを始めて意識する。

収まっていく快楽の余韻を感じながら、波の音に耳を傾ける。



「大事な事は二つなの。まず、上がる時には絶対に息を止めない事、二つ目は必ず複数で潜る事。」

スクーバダイビングのアドバンスの資格を持っている優香がく教師の口調で私に語りかける。

私と優香はく島の裏側にある岩場の多い海岸にいた。私達の回りにはスクーバダイビングの器材が二人分、散らばっている。

私は三年ほど以前に、海外で一度経験しただけのダイビングを優香とともに楽しもうと、朝からこの海岸に彼女と共にやって来たのだった。

美佐子は島の反対側に設置したテントの前で、昼食の準備をしているはずだ。昨日の夜の相談で、まったくの初心者に近い私と、美佐子の両方に一度にダイビングを教えるのは無理があると言う理由で、こうなったのだった。昼までが私、そして午後が美佐子、夕食の準備は私の仕事だ。

一通りの説明を終え、優香が私に微笑む。「じゃ、始めましょうか」

私達はそれぞれ、空気を入れたスタビライザーにボンベとレギュレーターを取付け、海に投込み、フィンを着け、飛込む。

朝のまだ冷たい海水がウェットスーツに染込み、私は小さく息を吐く。だが水中で身体を数回激しく動かしてやると、スーツに染込んだ海水が体温によって暖まり、絶好の断熱材となる。

優香が、海面にスタビライザーによって浮んだままの器材を、私にその装着方法を解説しながら、ゆっくりと身につけて行く。

私もその優香の動作を真似、スタビライザーに取付けられた器材を背中に背負い、ウエイトベルトを身体に巻付ける。

優香が軽くフィンを蹴って水をかき、私の後ろに回りこんで器材のチェックをする。

優香の手がベルトのねじれを修正する。「OK、いいわよ」

水中マスクをはめ、レギュレーターを啜える。水面でレギュレーターを吸込むとボンベの空気が、少し圧力をもって私の口内に吹込んでくる。

私はボンベの空気を一息吸い、身体を海に沈ませる。水中マスクを通して見る海中の姿は、その瞬間でさえ印象的だ。

私の目に、水中で巧みに身をひねる優香の白いウェットスーツを着た姿が写り、私はその優香に続き、沖に向かって泳ぎだす。

水中では海面の波は殆ど感じない。私達はフィンで水を蹴り、徐々に深く潜りながら海中を進む。

海水は見事な程の透明度を持っていた。海面にその先端を僅かに覗かせている岩場も水中ではどつしりとした広がりを持ち、その表面には珊瑚を初めとする様々な小動物が、人間には伺い知れない独自の営みを繰返していた。

岩場の割れ目には、夜行性であるウニが潜り込み、表面に張付いたイソギンチャクがプランクトンを取入れようと、ゆらゆらとその原色の触手を揺らす。一見、岩と区別がつかない外見もつた、人間の頭ほどの大きさがあるシヤユ貝が、私達のフィンの巻起こす僅かな波に驚いて口を閉じる。岩に生えた植物の枝のように見える珊瑚が微かな海流に合せて、一斉に揺れる。魚は比較的少ないが、目に止る種類は全て都会では水槽のなかでしか見ることの出来ない熱帯魚だ。

レギュレーターの排気口から吐出した呼気が、次第にその泡の大きさを増しながら海面へと上昇していく。泡はその表面に太陽の光を受け、きらめき、まるで生き物のようにその形を変化させる。

優香は時折、横に並んで泳いでいる私に、水中マスク越しの視線を向ける。その視線に微笑みを帰す私に、彼女が身振りで進む方向を示す。

私達は岩の間をすり抜けるようにして泳ぎ、更に沖に進む。

五分程度泳いだ頃、急に、今まで辺りにあった岩が途切れ始める。そして私は目前に大きな空間の広がりを見る。

その直径十メートル程度のいびつな円形をした平らな海底には、海水と太陽光線によって長い時間を経て漂白され、色を失った珊瑚のかけらと、様々な貝殻に覆いつくされ、白色に輝いていた。そしてその海底を、なだらかに海面にまで続く、黒々とした岩と珊瑚が取囲み、その全てに海面からの太陽光線が降りそそいでいる。

私は、その素晴らしい「海中の砂丘」とも言える光景に引付けられ、一瞬息をする事さえ忘れていた。

横で泳いでいた優香が、軽く私の腕に手を触れる。振向く私に彼女が微笑みを帰す。私達は泳ぐのを止め、スタビライザーの空気を調整する。

ほどよい浮力を得た私と優香は、その「海中の砂丘」のほぼ中央に、無重力状態のように浮ぶ。私は水深計に目をやる。針は水深八メートルの直前で止っていた。

私は大の字に身体を伸ばし、その地上では味わう事の出来ない浮遊感を楽しむ、呼吸と共に、身体がゆったりと水中を上下する。息を吸うと上昇し、吐くと海底に向かって沈む。私は戯れに、身体を海底に付くほどに沈みこませ、その表面を覆っている珊瑚のかけらに手をかざす。その私の動きによって生じた、僅かな海水の流れにも珊瑚の白い微粉が巻き上がる。

優香が私の目の前の海底に、私と同じ様に身を横たえる。優香が私に悪戯っぽい視線を向け、両手を大きく一振りする。

その彼女の起こした海水の流れに、珊瑚のかけらが辺り一面に巻上り、私達二人の視界を白く濁らせる。

珊瑚のかけらの中で、海底より浮び上がった優香が、水中で私にダンスを披露するかのような身を踊らせる。

海面からの太陽光線によって珊瑚のかけらが銀粉のように輝く。その中で重力から解放された優香が、美しいプロポーションをウェットスーツに包み、身体をしなやかに、そして自由に活動させるその姿は、人魚の伝説を私に思い出させる。

私はフィンを蹴って浮き上がり、水中の優香を両手に捉え、抱しめる。ウェットスーツを通して感じる、彼女の柔らかな身体が心地好い。

優香の両手が私の背中を抱き、私達はお互いの水中マスクが当たる程に身を寄せ合う。

二人の周囲は、私が巻上げた珊瑚の白いきらめきを取囲まれる。

優香が啜えていたレギュレーターを外し、私に差出す。私は一瞬のためらいの後、彼女の真似をしてレギュレーターを外す。その私の口に優香が自分の啜えていたレギュレーターを啜えさせ、前面にある弁を押す。空気が弁を通じて、その中に入り込んだ海水を押し出す。私は優香のレギュレーターで呼吸する。

私達はお互いのレギュレーターで、互いの背負ったボンベから空気を吸い、更に身体を寄せ合う。

私達は暫くの間、お互いの身体を全身で感じ取り、水中での命の糧とも言える空気を交換しあ
いながら水中にたたずむ。

優香が身体を僅かに離し、右手を私のウェットスーツのファスナーに掛け、一気に臍の辺りま
で引き下ろす。

私のウェットスーツが大きく開き、裸の胸に冷たい海水が触れる。私はその唐突な優香の行動
を咎める間もなく、身を震わせ、一瞬、呼吸を止める。

優香が両手で私の裸の胸に触れる。

私が優香に怪訝な表情を向けると、彼女は恥ずかし気に私を見詰め返し、微笑みを向ける。

優香の両手が私の胸を這い、ウェットスーツと肌の間に深く差込まれ、背中にまで達する。新
たな海水が流れ込むが、冷たさに馴れたのかショックは無い。私は優香の暖かな手を背中に感じ
る。

優香がレギュレターを口から離し、唇を私の胸に当てる。舌が私の胸を這い、軽く歯が当る。

その優香の愛撫に、私は下腹部に緊張を感じ始める。

息が続かなくなるまで優香は私の胸を舌で愛撫した後、左手を私の背中から抜き取り、水中に漂
っているレギュレターを取り、口に啞える。

私は、優香が私にしたように、彼女のウェットスーツのファスナーに手を掛け、引き下ろす。
水着が現れるものと思っていた私の目に写ったのは、優香の裸の乳房だった。

優香が恥ずかしげな表情を捨て去り、私に悪戯っぽい視線を向ける。

私は優香に微笑み返し、両手を優香の乳房に当て、その表面を摩り上げるようにゆつくりと揉
む。優香の乳房は冷たい海水の為か、いつもよりも引締って感じられた。

私の指が、彼女の固くなりかけた乳首に触れると、優香のレギュレターから吐出される呼吸が
少し早くなる。

私は優香のウェットスーツの肩をまくり上げ、裸の肩に右手を掛け、左手でレギュレターを外
す。

海中で味わう優香の乳首は冷たく、そして塩辛かった。

優香が乳首を愛撫する私の頭に手を掛け、自分の乳房に押付ける。私は優香のウェットスー
ツのファスナーを一番下まで引下げ、その下腹部に手を差入れる。

暖かな優香の裸の下腹部が手に触れ、柔らかな太股の間に私は指を這わす。その私の手の動き
に優香のウェットスーツ全体がずり下がり、彼女の陰毛が海水に晒され、揺れる。

私が優香の陰毛の手触りを楽しみ始めた頃、呼吸の限界が来る。

愛撫していた乳房から顔を離し、優香の下腹部から手を抜こうとした時、優香が太股で、その

手を挟みこむ。

優香が水中に浮んでいるレギュレターを取り、私の口に咥えさせる。

私は優香の持ったレギュレターで呼吸しながら、彼女の下腹部への愛撫を続ける。

優香が脚を開く。

私の指は、優香の海水に晒された性器を這う。人差指と薬指で押し開くようにすると、その内
部に海水の冷たさを感じたのか、優香が僅かに腰を震わせる。

中指で膣口付近をまさぐるように愛撫し、掌を陰核付近に押付ける。指が彼女の暖かさを感じ
る。

優香が、自分と私のスタビライザーの空気を抜く、大きな気泡が海面に向かって上昇して行き、
私達は絡まり合ったまま、海底に沈みこむ。

海底に膝を付いた姿勢で、私は優香へ愛撫を続ける。中指が海水より密度の濃い粘液の滑りを
感じ取るが、すぐにそれは海水に溶けこみ、消え去ってしまう。

優香のレギュレターから、大きく気泡が吐出される。

優香が背中に取付けたスタビライザーのバックルを外し、ジャケットを脱ぐような格好で、ボ
ンベを付けたままのスタビライザーを海底に置く。

ボンベから繋がったレギュレターだけを口に咥えたまま、彼女は身を横たえる。

私は海底にウェットスーツをはだけた格好で横たわる優香を見る。白い珊瑚のかけらと、優香
の肌の色、そしてその下腹部に揺れる黒色のコントラストが私の欲情を刺激する。

私は優香の開かれたウェットスーツを更に開き、その肌の滑らかさを味わうように全身に手を
這わす。

優香が僅かに首を振り、その髪が海水に揺れる。

私は優香の背中に手を差入れて抱起こし、二人のレギュレターを外し、唇を合す。
海水の塩辛さの中で、優香の舌がうごめく。

優香が身体を器用にくねらせ、ウェットスーツを脱ぎ捨てて。海中の中で全裸を晒す彼女は、
はかない程に頼りなげに見え、その姿態が更に私を駆立てる。

優香がウェットスーツの下腹部に手を入れ、その中の私のペニスを触れ、窮屈な中で勃起して
いるペニスをさすり上げる。

優香が私のスタビライザーに少量の空気を送り込む。浮力が生じ、私の身体は僅かに海底から
浮び上がる。

優香が私のウェットスーツをずり下げ、ペニスを取出す。咥えているレギュレターから大きく

息を吸込んだ後、優香は私のペニスに唇を当てる。

冷たい海水に晒された亀頭に、優香の暖かな舌が絡み付く。

私はその快感に呼吸を乱し、レギュレーターから大きく気泡を吐出す。

優香は舌と唇で私を駆立て、そしてフィンを蹴り、珊瑚のかけらを巻上げながら海面に向かって上昇する。

私が優香を追って海面に顔を出した時、彼女は五メートル程離れた、海面から突出している岩にたどり着き、よじ登ろうとしているところだった。

黒く濡れたゴツゴツとした岩に、全裸の白さが映える。私は彼女の背中と腰、そして尻の二つの半球が形成する、なだらかで豊かな曲線に目を引付けられる。

優香が岩に登り、海面から彼女を見詰める私に、誘い掛けの手を振り、濡れて顔に張付く髪を掻き上げる。

私は優香が海底に残していった器材とウェットスーツを引つ張りながら、岩に座る優香に向かって水をかく。

優香が差出す手を取り、私は岩に身体を引上げる。

優香が自分の脱いだ、ウェットスーツを私から受取り、岩に敷物を敷くように広げ、誘い掛けるような視線を向ける。

私は半分開いたウェットスーツのファスナーを引き降ろし、脱ぎ捨てる。

優香が岩の上の即席のベッドに身を横たえる。

私が優香の首筋に張付く濡れた髪に、愛撫する手つきで触れると、優香がまぶたを閉じる。

優香の唇はやはり海水の味がした。

優香が両脚を開き、その下腹部に私は胸から這わした唇を当てる。舌先で、塩辛い陰毛の房をくすぐると彼女は小さく声を上げた。

私は舌を優香の太股を通過させ、陰核に一瞬の間だけ触れた後、その奥に進める。

優香の二枚の内褌と、膣の回りは既に熱く、海水とは違った液体でぐっしりと濡れていた。

私の舌が優香の性器を刺激すると、優香が僅かに身を起す。

「……ねえ、お願い……、もう待てない……」

私は顔を優香の性器から離し、問いかける。

「……以前、一緒にここに来た友達ってのは恋人だったのか……？」

「え？」

「船の中で民宿の主人と話してたら」

「……昔よ……、私がまだ男の人に抱かれるのが恐かった頃……」

私は優香の目を覗きこみ、そしてその隠された事情を想像する。

「そうか……」

私は優香の身体に覆い被さって行く。その途中で、優香が自ら私に両手を差出し、背中を強く抱しめ、私を自分の身体に引付ける。

優香が苦しい程に強く、私を抱しめ、その太股を私の腰に絡み付かせる。

「抱いて……うんと強く」

優香が私の耳に囁く。

やっと真昼の兆しを見せはじめた太陽の光が、私の背中を暖める。岩に砕ける波音が辺りに小さく響き、その音が一層静けさを意識させる。私はその自然のBGMの中で優香を抱く。

波音に優香の喜びの声混じり始める。

ハツとするような大きく、そして輝く無数の星々。都会で生活する者にとって夜空とは、ネオンと街灯の光の上に広がるぼんやりとした一枚の黒い背景である。しかし、この夜空は、見上げる者の目を引止めずにはおかない豪華な、自然と言う芸術家が創作した一つの絵画である。

夜空にキャンプファイヤーの炎が揺らめく。

私は炎を見詰め、木々が燃える香ばしい匂いを胸に吸込み、そして星々に飾られた黒い水平線の上に輝く月に目をやる。

私達三人は、浜辺に近い場所に海の方向を向いて座っていた。水着の上にTシャツを羽織っただけの肌に、夜気が快い程度に冷たい。

「静かね……、恐いくらい」

私の右に座る美佐子が視線を海に向けたまま呟く。肩が私に触れる。

その美佐子の言葉に、私は改めて波の音を意識する、常に耳にある波音はいつのまにか私の意識から消え去っていたのだろう。

「星がこんなにあっただなんて忘れていたわ……」

優香が私の左で囁く。

私はその二人の言葉に答える言葉を知らず、黙り込む。多分二人も返事を期待してはいないだろう。

私はあまりに大きく、あまりに美しく、そして威厳さえ感じさせる、この自然の風景の中での

自分の存在の小ささを、不意に意識する。一瞬、孤独感が私に襲いかかる。

私は両腕を美佐子と優香の肩に伸ばし、その存在感を確かめるように、二人を引寄せる。両方の脇腹に二つの柔らかい肉体と、ほっとするような暖かい体温を感じる。

「好きだ……」

私はその時、私の胸の内に湧きあがってきた感情をそのまま言葉にする。言った後でさえ私は、その言葉の意味を完全には意識してはいない。

その私の唐突な言葉を、二人はごく自然に受入れ。身体をさらに私に押付ける事で答える。

優香がぼつりと呟く。

「私も好き……よ」

美佐子が私に顔を向け、頬に唇を当てる。

私は優香と美佐子を引寄せ、その唇の柔らかさを交互に味わいながら、愛と言うものの一端を理解出来たように感じる。

美佐子が立ち上がってTシャツと水着を脱ぎ捨て、優香が一瞬の躊躇の後にその動作を真似る。

二人の女性が、炎の光にその全裸を晒す。

炎が揺らめき、その都度二つの肉体に生じた陰影が変化し、肌をオレンジ色に染める。

私は二人の女性が炎を背にして立つ、その美しいオブリジェに目を引付けられ、息を飲むほどの感動を覚える。そしてその感動は、私の内部から湧きあがる衝動を誘導する。

私は二人の前に立ち、着ているものを脱ぎ捨てる。

私の内部から生じた衝動は「欲望」と言うだけの言葉では言い表せないほどに、原始的なものだった。ある意味では恐ろしく、そしてまた雄大で美しい、この自然の中に身を置き、孤独感と自分の小ささ、そしてはかなさを意識した時、私は私の中にその感情に反発する物の存在を知る。そしてその「存在」は今、私の目の前に二人の女性として「存在」していた。

私はまるで飛付くかのように二人に近付き、そして両腕に抱く。

六本の腕が絡まり合い、三つの炎に照らされた肉体が、夜の海と空を背景にして身を寄せ合った。その姿は人間と言う、自然と対比した時には、あまりに矮小な存在が己を精一杯に主張し、その短い人生の絶頂の時の喜びを、声高らかに宣言しているかのように見えた。

私は美佐子の乳房に顔を埋め、その奥にある心臓の鼓動を聞く。美佐子が私の頭に手を置き、髪をかき回し始める。

優香が、美佐子と身体を合せる私を背中から抱き締め、その乳房を私の背中に押し当てる。二つの突起を私は背中で意識する。

美佐子と優香が私の前に並んで膝を付く、二人は一瞬、視線を絡ませ合い、互いの唇を貪るよ

うに吸い合う。

二人が唇を離れた時、まるで名残を惜しむかのように、二人の舌が唇から覗く。

私のペニスが優香が、美佐子の唾液で濡れた唇を当て、亀頭を包みこむように啜える。舌先が私の尿道をくすぐり、唇を窄め、強く吸い上げる。

美佐子が、私の袋を撫でさすりながらペニスの付根付近に顔を寄せ、舌を這わす。

私は、その二人が与える快感にペニスを更に固くする。美佐子が、その私の反応を楽しむように舌を這わし、睾丸の片方を口に啜える。優香の舌が亀頭を舐め上げる。

美佐子が一旦、唇を離し、ペニスの中央辺りを横から啜え、ゆつくりと、前後に唇で擦り上げる。快感が増す。

私は二人の頭に手を当て引離す。二人の唾液に濡れたペニスが炎に照らされ、その色と形を強調される。

美佐子が優香に身振りで合図し、優香がビーチシートを敷いた浜辺に身を横たえる。

その優香に美佐子が覆い被さり、二人の乳房が触れ合う。

美佐子が脚を優香の脚に絡ませ、膝を使って大きく開く。優香が腰を上に向かって突出し、美佐子が膝を立て、尻を掲げる。

私は重なり合う二人の後ろに膝を付き、目の前にある二つの性器を見る。美佐子が尻を私に向けて突出し、優香が脚を更に開く。

私は美佐子の尻に手を当て、その量感のある柔らかさを確かめるように撫で回し、そして、その二つの半球の狭間にある性器に顔を寄せる。

膣口周辺を舌で刺激し、染みだす愛液を絡み取った舌を陰核に伸ばす。陰核とその周囲を唇で挟みこみ、舌先で押し下げようにして表皮を剥く。

私の舌が、陰核の内部に秘めた瑪瑙色の球体に触れたとき、美佐子が顎を上げ、腰を小さく震わせる。

優香が、その美佐子の反応に腰を持上げ、私を誘う。

私は美佐子の膣に舌を滑り込ませ、その内部の滑りを味わいながら、手で優香の陰毛に触れる。ざらつきに指を這わせて行き、そして陰核を親指と中指で軽く摘まむ。

ゆつくりと指を擦り上げるようにして、陰核を刺激し、その頂点に人差指を当てる。

優香が僅かに背中を逸らす。

優香と美佐子が互いの身体をまさぐり始める。二人の荒い息に声が混じり、二人は唇を合す。

私は、優香の固くなった陰核を人差指で、軽く押えるようにしながら、親指で膣口に触れる。

既に愛液で十分に濡れたその付近を、親指の腹で撫で回してから第一関節辺りまで挿入する。膣

口の筋肉が、微妙に動くのが伝わって来る。

私は美佐子の性器から唇を離し、自分の親指が優香の膣の中に潜り込んでいる様子を見る。二枚の襞に挟まれた親指が愛液で濡れ光り、優香の内部から、その周辺の肉を押し上げている光景に、私の欲望が限度を越える。

私は優香の性器から親指を抜き、漏れだした愛液を四本の指で掬い取り、亀頭に塗付ける。私の尿道からの粘液と、優香の愛液が混じり合い、亀頭が濡れる。

私はペニスを握り、優香の膣に当てる。優香が腰を自ら、ペニスに向かって押付けてくる。私はその優香の動きに合せ、ペニスを挿入する。優香の内部に収め切った時、彼女が満足しきった者の喜びの声を漏らす。

私が腰を動かし始めると、すぐに優香の動きが同調する。

美佐子が尻を、私に催促するように振る。性器がよじれ、愛液が押出され、太股に糸を引く。私は美佐子の性器の両端に手を当て、左右に押し開く。さらけ出されたその内部に舌尖を当て、舌を上上の肛門付近に這わせる。

美佐子がかもつと強い快感を求めて、自分の股に手を伸ばし、陰核に触れる。私はその美佐子の手首を握り、刺激する陰核から指を引離す。美佐子が身体を振る。

私は美佐子の性器と肛門に、舌で弱い刺激を送り込み続ける。

私は強く腰を振る。激しくペニスが優香の膣に出し入れされ、二枚の襞がペニスを包みこむように刺激する。

膣の筋肉がペニスを締め付け、亀頭に子宮口が当たる。優香が美佐子の下で身体を激しく動かし、声を上げる。

美佐子の性器から愛液が白濁した糸を引く。腰が快感を求めて、私の舌に性器を押し付けようと動く。

私は腰を激しく振り続け、ペニスの付根をリズムカルに優香の陰核に押し付ける。

優香が絶頂の声を張上げ、身体を激しく逸らす。強くペニスが締め付けられ、子宮口が亀頭を擦り上げる。

その刺激によって、私は射精の快感に絞出すような声を上げ、絶頂を迎える。ペニスが痙攣し、その度に精液が優香の内部に注ぎこまれる。

私は、まだ勃起から解かれていないペニスを優香から抜く。優香がその瞬間、ピクリと腰を振るわせる。

私は、手首を握っていた美佐子の手を引寄せ、ペニスを触れさせる。

優香の愛液と、私の精液で濡れた。ペニスを美佐子は握り、その滑りを利用して擦り上げる。ペニスの先端から精液が漏れだす。

射精後の敏感になった。ペニスに、苦痛に近い快感が走る。

美佐子が、優香の耳元に何かを囁きかけると、優香が軽く美佐子に口付し、身体を二八〇度回す。美佐子の下腹部に顔をもつて来て、二人はお互いに69の姿勢を取る。

美佐子は、自分の目の前の、優香のまだ濡れたままの性器に舌を当て、膣から漏れだす私の精液を舐め取る。

優香がその快感に溜め息を付き、目を細める。

優香の両手が、顔の上にある美佐子の尻を押し開き、その中心にある陰核に舌を当て、押し潰すように刺激すると、美佐子の僅かに開いた膣から新たな愛液が染みだす。

私はその愛液を親指に絡め取り、その濡れた親指を美佐子の肛門にゆっくりと挿入する。

私は、括約筋の動きを楽しみながら、浅いところで指をくねらせる。

優香が舌を当てている美佐子の陰核が、優香の舌に抵抗するように硬くなり、膣から漏れだした愛液が、陰核を濡らす。

美佐子は、その優香の愛液を舌で受止め、その滑りを陰核に塗付けるようにして愛撫を続ける。

私は美佐子の肛門の中で指を動かしながら、彼女の性器に顔を近づける。唇を二枚の髻に当て、開き、その内部の膣の周辺に舌を這わせる。

美佐子が、三つの快感の源を同時に刺激される快楽に身体をよじり、切迫したような声を漏らし始める。その声に、私の顎の下で美佐子の陰核を舐め続ける、優香の舌の動きが、焦らせるように遅くなっていく。

私は舌を美佐子の愛液を拭うように動かしながら、ペニスが勃起を回復し始めるのを意識する。

優香が片手を美佐子の尻から離し、私のペニスを握り、尿道から染みだした僅かな精液を親指に付け、亀頭を撫で回す。

優香の手の中で、ペニスが再び勃起する。私は美佐子の性器から顔を離す。

優香が淫らな微笑みを私に向け、再び両手を美佐子の尻に当て、大きく性器を開き、その内部を私に見せ付ける。美佐子が尻を私を誘うように振る。

私は、優香が押し開く美佐子の性器に、ペニスを当て、一気に貫く。

優香が美佐子の性器から手を離し、陰核を軽く摘み上げる。

私は美佐子の腰に手を当て、腰を前後に振る。美佐子が大きく背中をよじらせ、顎を上げ、快

感の声を夜空に向かって発する。

優香が目の前で揺れる私の袋に、もう一方の手で触れ、軽くその表面を撫で始める。私は新たな快感と、欲望の高まりを覚える。

私と優香による、充分すぎる前儀でピークの一步手前まで追詰められていた美佐子が、急速に絶頂に向かって駆け登って行く。

美佐子が急に、甲高く、押出すような声を張上げる。

「だめっ！ ああ、もう！」

美佐子の身体が無秩序に大きく痙攣し、その度に膣が、その内部で動きを止めた私のペニスを締付ける。

私はその筋肉の動きを味わい、そして腰を再度、動かし始める。

美佐子が、より高く声を上げ、下に敷いたシートを指が白くなる程に強く、両手で掴む。優香が大きく口を開け、私の袋に唇を触れる。舌がその表面をくすぐるように舐め始める。

私はそのもどかしげな快感に、射精への欲望が膨れ上がるのを感じる。私は快感の頂点を求め、激しく腰を振る。

私と美佐子の接点から、白く濁った粘液が滲みだし、私はその粘液で濡れたペニスに美佐子の内部へと、前後に動いている様子を見詰め、欲望の昂ぶりを自ら助長する。

私は美佐子の尻の肉を力を入れて掴み、下腹部を押し当て、尻が歪む時のその量感を味わう。

美佐子が、ピークに近い事を知らせる声を上げ始める。

私は腰の動きを早める。射精への欲望が頂点へと駆け上り、尾低骨の辺りからペニスへと、衝動が突抜ける。

美佐子が、更に深く挿入される快感を味わう為に、尻を自ら私の腰に押付け、さらにその尻をくねらせる。

ペニスが捻れ、膣の筋肉が締付け、亀頭を子宮口が刺激する。私は腰を突出し、美佐子の内部の、その最深部に精を放つ時の快楽を味わう。

美佐子が声にならない叫びを上げ、大きく身体を痙攣させる。

私は亀頭に、自分の射精した精液の暖かさを感じる。腰を少し引くと、ペニスに快感が走り、少量の精液が再び射精される。

美佐子が、徐々に収まっていく快感の余韻に細かく腰を痙攣させ、全身の力を抜く。

私は美佐子から身体を離し、射精後の快い脱力感を味わう。



肉の欲望に憑かれたようなセックスを終え、浜辺に座る私の耳に、波の音が復活する。私は夜空を見上げ、何事もなかったかのように輝く星々を見る。何故か涙で視野が滲んだ。

私の両横に美佐子と優香が座る。二人は言葉も無しに私に身を寄せてくる。暖かい二人の体温が私の身体に染透り、私は二人の腰に手を回す。

その時、私の脳裏には先程感じたような孤独感は、存在していなかった。

了。